

地道作業でつながりを

共との先へ

下

相模原殺傷事件・半年

事件で狙われたのは、社会とのつながりがほとんどない人たちだった。事件を起したのは容疑者かもしれないが、多くの障害者が大規模施設に入らざるを得ない社会をつくってきたのは、私たち一人一人の責任に。

容疑者を免責するつもりはないが、事件の背景となる社会の責任と課題は別に与える必要がある。亡くな

た。でも現に実行している人に出会い、行政に二十四時間の介護保障を求め、実現した。

それでも「知的障害者は難しいのでは」と考えていた。施設で暮らす人の割合は、身体障害者が五十人に一人、知的障害者は五人に一人と言われる。だが、こちら実践している人たちに出会い、今は私たちの団体も力を入れている。重度の重複障害者でも地域で暮らす生き方は、少しずつ広がっている。



「介助者」として活動
渡辺琢さん

事件直後、どんな方が入所し、どんなふうに暮らし始めたのか知りたいと思いい、現場を訪れ、元職員や入所者の家族から話を聞いた。容疑者の言動も含めた。「意思疎通ができない、施設でしか生きられない人たち」という刷り込みが社会にあるが、間違いだと感じる。狙われたのは本当に施設しか選択肢がない人たちだったのか。そこまでさかのぼって検証すべきだ。

今、私の目の前には、身体障害者手帳一級と知的障害者の療育手帳第一種を交付され、重度の重複障害と言われながら一年半ほど前から一人暮らしを始めた青年がいる。一度は施設に入りかけたが、地域での自立を選んだ。彼とは一緒に夜の町に出

かけ、レストランで食事をしたりにしている。些細なこともかもしれないが、奪われていたかもしれないこの光景の中に「尊厳」があるかもしれない。

「共生社会」と言葉で言うだけでなく、実体がある現実にしていかなくてはならない。二十四時間の介護保障が実現していない自治体も多い。一人一人が抱える課題を、地域、家族ごとに一つ一つ支援していく地道な作業が必要だ。その先に、重複障害者が夜の町で食事をしている光景がある。

わたなべ・たく 七五年、名古屋生まれ。日本自立生活センター（京都市）の介助コーディネーター。著書に「介助者たちは、どう生きていくのか」